



「四年後へ」

牧師 横山順一

過去一勝しかできなかったラグビーワールドカップ、イギリス今大会で日本は三勝した。しかもラッキング四位の南アフリカを倒した。

三勝して一次リーグを突破できなかったのは史上初という。残念だが、これで一九九五年の南ア大会で、ニュージーランドに一四五対十七で大敗した「ブルームフォンテーンの悪夢」は払しょくされた(涙)。

五郎丸のルーティンに関わらず、ラグビーはキリスト教信仰のスポーツである。

一八二三年、ラグビー校の生徒だったウィリアム・ウエップ・エリス少年が、サッカーの試合中、思わずボールを抱えて走ったのが始まりとされる。

エリスはその後、オックスフォード大学へ進学し、牧師となった。Wカップ優勝チームへ贈られるカップは「エリス杯」だ。

楕円形のあのボールこそは、どこに転がるか分からない「信仰」

のシンボルである。

「信仰」だからこそ、フオワードはスクラムを組んでそれを固く守る。

そしてひとたび出されたら、自分より後ろの者にパスしなければならぬ。信仰は次へと継承されるものだからだ。うっかり前へパスすると反則「スローフォワード」である。

また、「信仰」を渡された者は懸命にそれを受け取り、前に落としてはダメだ。それは重い価値がある。落とすと「ノック・オン」の反則を取られる。

選手たちはひたすら「信仰」を受け継いで「トライ」を目指す。それは最終の「ゴール」ではなく、あくまでも「トライ」(試す)ではない。

トライはボール(信仰)を地に着けることで認定される。キックによる得点もあるが、それはオマケ。基本は「地に着ける」こと。そうして試合が終われば、もはや敵味方なし、「ノーサイド」である。

これほどにキリスト教信仰の基盤が滲み出るスポーツであれば、その強豪がほとんどキリスト教主

義の国であるのは、当然の帰結かもしれない。余りにも偏っているので、オリンピック種目に選ばれない。

だが、イギリス大会が終われば、次回二〇一九年のワールドカップ会場はわが日本だ。神戸も試合会場に選ばれている。

イギリスでの活躍によって、日本はランキング十位に上がった。無論、二次(ベスト8)への道のりはお遠い。

人口比一%のクリスチャンを、もし二倍にできたら、安売法をつぶすことができるという分析を聞いた。

二倍になったら、ラグビーももっと強くなれるかも。

ちなみに私の鼻肩は、言うまでもなく大学は同志社であり、社会人は神戸製鋼だ。「しんこう」だもんね。

でも大阪朝高も、関学も関東学院も応援してる。

ジャパンのチーム愛称は、「ブレイブロッサムズ」だ。なんか同期の桜つばいけど、まあそこは目くじらたてまい。

四年後を目指して、私もいよいよ余念なく応援したい。